

## 優秀作品

### 「お母さんが乳がんになったとき」

長塚 有沙 (ながつか・ありさ)

17歳／高校生／茨城県

それは私達家族にとって突然の事でした。毎年人間ドックを必ず受けている母が、乳がんになってしまうとは思いませんでした。

人間ドックを二ヶ月後に控えたある日、母は入浴中に右胸に違和感を感じ、医師から教わった自己検診をしたそうです。小さなしこりを見つけ、父にだけその事を話し、次の日病院に行ったのです。マンモグラフィ、超音波検査をし、数日後、乳がんの疑いが強いと診断されました。医師は、がんでも極めて初期で、転移の可能性も少ないと、よりよい治療を受けるよう専門の病院を紹介してくれました。そこでさらに色々な検査をし、非浸潤性乳管がんと確定し、手術をすることになりました。

母のようなタイプのがんは、切開した部分から悪いところだけを取り、胸の形を残す手術ができるそうです。私は検査していたことも知らず、週末に帰省した大学生の兄と一緒に両親からその事を告げられ、がんを知り、呆然として言葉が出ませんでした。「大丈夫、一週間で帰れるの。放射線治療もするけど通院だし、傷も小さいって。よく自分で見つけたってお医者様もほめてくれたのよ。」母は、病気を前向きに受けとめていました。私は心配で泣き出したいのをこらえ、「わかった。早く帰ってきてね。」と言うのが精一杯でした。

私は、現代の医療の進歩を母の入院を通して改めて感じました。早期発見のため、短い入院生活です。金曜日入院し、医師と面談し、外泊許可で日曜午後まで家で過ごし、夕方病院へ戻り、月曜日の十時から手術です。学校から帰ると、父から午前中に無事終わったと連絡がありました。それから二日後に退院し、手術後わずか十日で職場復帰しました。

母が入院中、初めて父と二人でした。父はなれない家事をし、仕事に行き、職場が病院に近いので一日に何度も様子を見に行っていました。私は、絶対泣いてしまうから行かずにいました。手術の次の日の朝、母はまだ痛くて大変なはずなのに、「元気？明日帰れるよ。」と、私を安心させるためにメールをくれ、この時は我慢できず布団の中で泣きました。

あれから半年、変だと思った時にすぐ行動した勇気のおかげで早く回復し、笑顔の母のいるあたり前の生活がとても幸せです。

お母さん、生きててよかったね。手術してくれた先生、いつもそばで支えているお父さん、みんなみんなありがとう。